

# ポートレート制作における アイデンティティ論理解の影響

## A study of influences of my portrait works from understanding of the Identity theory.

長島 聡子

NAGASHIMA Satoko

キーワード：アイデンティティ、肖像画、自我、自己

Keywords : identity, portraits, ego, self

The aim of this report is to explain how my understanding about some theories about the *self*, the *ego* and the *sense of identity* have influenced a series of portrait paintings of mine. In addition, with this report, I also intend to explore new perspectives for future academic dissertations after contemplating my recent computer graphic works, which were inspired by some ideas of Tadashi Nishihira, a celebrated Japanese scholar specialized in the works of Erik H. Erickson.

### 1. 制作動機

私たちの意識の底にある無意識の世界において、自己 (Self) と自我 (Ego) の概念について考えるきっかけとなった最初の出会いは、修士課程の授業でみた H. リードが描いたフロイトの無意識論理解のための手描きの図であったと記憶している。その無意識の底からわきあがってくる源泉のようなエス (id) のイメージは、「内側から湧き出て、次第に何かのかたちをかたどる」実験的な肖像画制作を促し、わたしの背中を押すものになったと振り返る。

当時、修士論文に関する様々な分野にわたる文献を読みつつ修了作品制作を同時進行するなかで、理論(文字)をこころの中で視覚的に想像することで、自分に引き寄せて理解しようとしていたことがたびたびあった。私の理論研究に据えたテーマと作品制作とは、それぞれが遠く異なる分野であり、決して関わったり交わったりすることはないと思えた。理論研究と作品制作の関係は、10年以上の理解あるいは誤解の熟成のなかで、作品制作の動機たる根本的な部分に「表現したい大切な思想の視覚化」のような形で徐々に拡大し、交差し、共存してきたと思える。

無意識の世界を「個人的無意識」と、さらに下層にある「集合的無意識」とに分け「元型論」を唱えたユングは、場面に応じた行動の基盤となる意識体系の中心を自我 (Ego)、意識も無意識も含めた「こころ」の中心を自己 (Self) としている。

また、アメリカの発達心理学者エリクソンは、1956年の論文「エゴ・アイデンティティの問題」の中で、アイデンティティという言葉について、次のように説明している。「『アイデンティティ』という言葉は、〈自分自身の中で永続する斉一性 (自己斉一性)〉という意味と、〈ある種の本質的な特性を他者と永続的に共有する〉という両方の意味を含んでおり、その相互関係を表しているのである。<sup>1)</sup>

このエリクソン研究でよく引用されるアイデンティティの定義は、アイデンティティが自分自身のみならず、他者と共有する斉一性 sameness によって形成されることを意味している。エリクソンの言葉によると、アイデンティティとは、これまでの研究者が「自己 self」としてきた部分と重なることが多いのだとし、「『自我』[という言葉] 主体 the subject に割り当て、「自己」[という言葉] 客体 the object に割り当てることが妥当だと考えられる。<sup>2)</sup>」とも言っている。

1 エリク・H・エリクソン著、西平直、中島由恵 訳『アイデンティティとライフサイクル』誠信書房、2011年 p.112

2 同上書 p.173



(図1)  
[Identify Identities #1]  
P100号パネルにアクリル絵具  
2012

# SELF EGO

(図1 資料)  
モデルの人物による  
手描きの「self」  
と「ego」

私たちの人格を主体的に形成するものが自我 ego で、客観的に高次のレベルで統合するものが自己 self という対比的な関係があるならば、この2つの言葉による肖像画のイメージを描くことができるのではないか。作品として実体化させることで、その理論を理解してみようと考えたことがこのポートレート制作のはじまりだった(図1)。

## 2. 言葉の選択

いくつか同じ手法による肖像画制作を通して、「自己」「自我」というたった2つの言葉に依拠し、一人の肖像画を描き上げるということへの疑問が生じ始める。心理学等の難解な専門用語に見えるこれら2つの言葉「self」と「ego」は、描かれた人物にとっては母国語でもなければ、その人の口から発せられた言葉でもない。シルクスクリーンで繰り返し塗り続ける、見る人には象徴的に捉えられるその言葉は、描かれた人物自身を表すべきだという考えを持ち始める。そのことが自分を呼ぶときに使う一人称「わたし」に着目していくことに繋がっていく(図2)。

日本には、「わたし」「わたくし」「僕」「俺」など、時代によって、居住する地域によって多様な一人称がある。どの一人称を使うかの判断は、置かれた立場や状況、その場を共有する他者との関係性によって使い分けられ、その人物の性格や人間性、思想までもが滲み出るものである。

私たちが自分自身について考えるとき、「わたし」の感覚“A sense of I”は、より意識的な感覚になるのだとエリクソンはいう。

「精神分析論が扱ってきた自我は、意識されていない機能であるのに対して、〈わたし〉は、conscious と aware を併せ持った意味における『意識的』であって、それ故に、『この意識的な〈わたし〉(the conscious “I”)]こそが、『人が自分自身に気づくということの核心(the one of human self-awareness)]であり、自己分析を可能にする能力と言われるようになったのである。<sup>3)</sup>」

意識と無意識、主体と客体、self と ego、白と黒のやりとりによって、人物像を描いていたときに感じた「言い得ていない」物足りなさは、エリクソンのいう「自己分析を可能にするような意識的なわたし」が表現できていないという感覚だったのかもしれない。

人物を描くということは、姿形を忠実に追いかけるだけでは、その人物像を何も表現できない。「表現したいその人物の持つ、意識的なわたしの感覚」を表現することがで



(図2)  
[Identify Identities  
#4]  
P100 号パネルにアクリル絵具  
2012

私  
わたし  
自分

(図2 資料)  
モデルの人物による手  
描きの一人称の数々

ければ、その作品は見る人に訴えかけるメッセージ性を持つものになるのではないかと直感的に感じる。

## 3. アイデンティティ論との関連性

この肖像画シリーズは、まだ展開する可能性がありそうだと思いつつも、作品制作環境の大きな変化に直面したことで、約6年間手付かずになっていた。2016年春、一人の大切な師との永遠の別れがあった。叶えられなかったその師からの肖像画の依頼と、制限ある制作環境から、この肖像画シリーズは、西平直によるエリクソンのアイデンティティ論理解に大きなヒントを得て、やっと一歩先に進めることになった。

西平は、アイデンティティという、今では日常用語としても使われるこのエリクソンによる思想を、「名詞」ではなく「動詞」として、固定されることなく組み替えられ続ける流動的なものと捉えている。

青年期の発達課題とされる「アイデンティティの形成」

は、幼児期にすでに始まっており、青年期の発達課題の達成によって終わるのではなく、人生の最期まで発達し続けるものとされる。なぜなら、アイデンティティとは、両親や年長者、空想世界の登場人物や、望ましくない人物像まで、子ども期に無意識的に同一化（アイデンティフィケーション）したものを、取捨選択しながら一つの自我を統合する秩序としてのアイデンティティとして、常に組み替えながら形成され続けるものと考えられるからである。

青年が求める、また青年を求める共同体が、その社会に「ふさわしい人物」として認証することでアイデンティティが形成される、とされる。いわば、「家族の中のわたし」「クラスの中のわたし」「職場でのわたし」はそれぞれが異なるアイデンティティであり、所属する共同体の中で何かしら役割を担っている。その日その場を共有する他者によって、認証され直されつづける存在意義こそが、組み替えられ続ける「わたし」の感覚であり、アイデンティティの形と言えるのではないだろうか。

これから先、親になるのか、祖父母になるのか、先生になるのか、どこのだれの生徒になるのか、いくつのアイデンティティを持つのか、死ぬまで分からない。死後に評価される芸術家もいるのなら、死んでからもその人のアイデンティティは確定されることはないと言えるのかもしれない（図3）。

図3は、2018年に制作したコンピュータグラフィックによる肖像画である。わたしにとっては、すでに他界した親族であり、茶道に関わる礼法の師であり、第3の祖母ともいえる彼女は、生前この肖像画制作を依頼してくださっていた。写真資料が多く手元に残っていたこと、ご遺族やご親族の協力を得られたことで、多くの「呼称」あるいは「アイデンティフィケーション」の痕跡の言葉による肖像画を、亡くなって2年半のちに完成させることができた。新たな展開となったこの第1作目は、韓国での展示の後、2019年1月に東京藝術大学 大学美術館で開催された展覧会「美術教育の森」に出品したことで、印刷物をご遺族に謹呈する機会に恵まれた。

#### 4. 故人のアイデンティティ

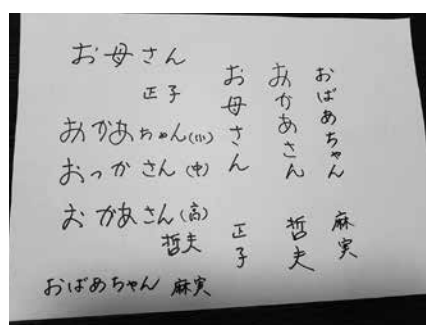
すでに他界した故人を描くということについて、その根本的な動機には、その人へ寄せる様々な想いがある。「遺影」という「更新されることのない固定されたままのイメージ像」は、礼拝の対象であり宗教上のアイコンとしての役割があるといえる。そのような象徴的なイメージである遺影以外の形で、何か新しい肖像を、遺族へのあるいはその人物自身への供物 offering のようなものとして制作したいという感覚が、この肖像画制作の動機としてある。

意識的な「わたし」という自己が、他者によって認証された数々の「同一化（アイデンティファイ）」によって形成されたり、自分の中の本質的な特性を他者と永続的に共有するアイデンティティがあるのならば、今は亡き人にも「同一化」される側として、その人物を知る最後の一人がこの世から消え去るときまで、アイデンティティは存在し続けると考えることができる。自分の中の「亡き祖父母に似た部分」「亡き誰かから受けた大きな影響」などを感じとるとき、その人物がどういう人なのか、何が好きで何が嫌なのかを「知っている」と確信することが、亡き人物のアイデンティティを守り継承する契機になるのではないだろうか。

今は亡きその人を誰かが心の中で呼ぶとき、名前や苗字だけでなく、「おかあさん」「おばあちゃん」「先生」「通称」など、その人とその人を知る誰かとの関係に基づく数えきれない呼称がある。私たちは、誰かの息子であり、娘であり、夫であり、妻であり、父であり、母であり、友人であり、先生であり、後輩であり、先輩であり、所属する（した）共同体の数だけいくつもの役割を持っている「わたし」である。それらの役割は、拡大したり交差したり縮小したり消滅したりしながら、私たちのアイデンティティ形成に深く関わっている。その捉えどころのない流動的な自己同一性、すなわちアイデンティティを捉えようとする試みが、わたしのポートレート制作の背景にあるもう一つの動機ではないかと思う。



(図3)  
[Identify Identities #6]  
コンピュータグラフィック  
2018



(図3 資料)  
人物の遺族や身近な人  
たちによる呼称の一部

## 5. 今後の課題

古墳の石室や石棺には、死者を葬るための壁画が描かれているものがある。副葬品と考えられる美しい勾玉や埴輪、装飾的な土器が出土することからも、古代から「奉納するものとしての美的なもの」があったと考えることが妥当であろう。仏壇や神棚に供える供物には、水や米や生花や香といった、決して故人の趣向に基づかない宗教上の習慣や礼拝に基づく供儀行為がある。それは仏教や神道、儒教<sup>4</sup>、キリスト教など、形式や意味あいには違えど多くの宗教に共通してみられる行為である。

フロイトが「古代の遺産」と呼び、ユングが「集合的無意識」と提唱した、私たち個人の記憶の奥底に流れる、全ての人類に共通する元型のイメージの数々のように、無意識の奥底には、亡き人と自分をつなぐ普段は感じられない共通する何かがある。宗教のしきたりに基づいた供儀行為がそのような先祖の無意識に対するものであるならば、故人の趣向に沿った供物は「意識的なわたし」へのお供えとすることができないだろうか。この意識的な部分に対する供物あるいは奉納するもの offerings としての肖像制作について、今後考えを深めたいと思っている。

今は亡き（かつてあった）故人の「意識的なわたし」の部分への供物として、このような肖像画を制作することが、目指すべき最終形態とは何なのか、目的地はどこなのか、まだ分からない。死生学や宗教学、心理学から示唆を得て、より深く考えて行きたい。まだ手探りで始まったばかりのこの肖像画制作ではあるが、これまでのどの作品群よりもこの制作に大切な意味を感じている。それはなぜか、どんな意義があるのか、客観的な視点からその制作の意味を位置づけることで、理解を深められればと考えている。

## 参考文献

- エリク・H・エリクソン著、村瀬孝雄、近藤邦夫訳『ライフサイクル、その完結』みすず書房、1989年  
エリク・H・エリクソン著、西平直、中島由恵 訳、『アイデンティティとライフサイクル』誠信書房、2011年  
河合隼雄『ユング心理学入門』培風館、1967年  
辻惟雄監修『増補新装〔カラー版〕日本美術史』美術出版社、2003年  
西平直『エリクソンの人間学』東京大学出版会、1993年  
H. リード『芸術による教育』フィルムアート社、2001年

---

4 儒教は宗教ではないという考えもあるが、韓国では秋夕や旧正月のチャレ（茶禮）や法事のチュサ（祭祀）として先祖の位牌に供物をそなえる儀式や行事があること、中国の三教（仏教、道教、儒教）のひとつであることなどから筆者は儒教を宗教と捉えることが妥当だと考えている。